

2014 年談話会

日時：7月19日（土）15:00-18:00

会場：明治学院大学 白金キャンパス 本館3階 1359 教室

有契性か恣意性か—オノマトペと音象徴—

◇ パネリスト

- | | |
|----------------|--------------------------|
| 泉 邦寿（上智大学名誉教授） | 「有契性と恣意性の間—オノマトペと意味の度合—」 |
| 篠原和子（東京農工大学） | 「音象徴にみる音と意味の動機づけ」 |
| 秋田喜美（大阪大学） | 「オノマトペの言語的統合性」 |

◇ 司会 石野好一（愛知県立大学）

[発表要旨]

有契性と恣意性の間—オノマトペと意味の度合—

泉 邦寿（上智大学名誉教授）

日本語のオノマトペに関して、だいぶ前に論文を書いたことがあるが、その後、多くの方々の論考が発表されてきた。筆者自身もワークショップやセミナー、また、授業などの機会に、その後の考察も加えて話をしてきた。今回は、現在の筆者の考えの一端を披露して、みなさんのご批判を仰ぎたいと思う。今のところ、以下のようなポイントでお話するつもりである。

オノマトペが有契的か恣意的かと問われれば、両者の間としか答えられないが、問題は中味と仕組みで、その説明を試みることにする。

まず、オノマトペに意味というものはあるのか、もしあるのならば、その意味はどのような性質と構造をもつのかを、一般的な語彙と合わせて考えてみたい。

その前提として、（ソシユールのいう）恣意性には実は2種類あり、それを区別することが必要で、その二つのレベルを組み合わせて考えると、オノマトペの意味構造もある程度分かってくるのではないかと思われるが、その実際の仕組みなどは当日の話の中で明らかにしたい。オノマトペの持つイベント性（出来事とその関与者など）についてもとり挙げるつもりである。

それらをもとに、＜意味の度合＞ということ、一般的な語彙とオノマトペについて検討し、それによって、擬音（声）語、擬態語、擬情語の区別とその連続性や転用、派生などについても理解できるのではないか、また同時に、そこには、一般的な語彙における包摂関係や文法化といった現象と並行する一般性もあるのではないか、

と問うことにする。

また、時間が許せば、オノマトペの基盤をなす音象徴について、〈濁音〉のケースを取り上げ、日本語の一般的な語彙にも共通に見られる現象を見た上で、オノマトペのデノテーションとコノテーション、〈濁音〉のもつ内在的な意味（つまり、単に文脈からくるものではないこと）を確認したい。

最後に、以上を踏まえて、日本語とフランス語のオノマトペの、構造的な違いや現れ方の違いについても多少触れてみたい。オノマトペの性質で一番重要な面はその直接性、情動性だろうが、その点も踏まえたい。

音象徴にみる音と意味の動機づけ

篠原和子（東京農工大学）

ソシュールの提唱した言語の第一原理としての「恣意性」の概念は、ここ 100 年にわたり現代言語学の主流の考え方を支配し、確固たる地位にあったように思われる。しかし近年、音象徴の研究を通じて、言語記号の恣意性という概念がそこまで確固たるものではないという見方が定着しつつあり、認知言語学を中心に音象徴現象を人間の認知と身体性の側面から再考しようという気運が高まっている。また言語研究以外でも、工学・教育・デザイン等さまざまな分野で音象徴の応用研究、実践の試みが見られる。本発表では、言語音（音声素性）がそれ自体でなんらかのイメージと結びつく、という現象について概観したのち、音象徴に関する筆者らの実験研究をいくつか紹介し、これがさらに「音」象徴を超えて他の感覚モダリティーとも関連している可能性を考察したい。

以下の 3 点について、それぞれ実験的方法で行った研究を紹介する。(1) 有声阻害音は無声阻害音に比べて「汚い」というイメージを喚起することを、3つの異なる言語で検証した。(2) 「大きい」というイメージをもたす言語音の性質（母音の開口度、母音の後舌性、子音の有声性の 3 点）について、4つの異なる言語でほぼ同様の傾向がみられることを検証した。(3) 人の性格と、感情という、直接知覚できないイメージについて、音を介在する象徴関係だけでなく「形～性格」「形～感情」という（音以外の）共感的むすびつきが見られることを検証した。これら (1)～(3)それぞれ、何故そのような音象徴関係が発生するのかを、調音音声学あるいは音響音声学の知見から説明できることを示す。

以上を総合して、音象徴現象は、知覚的モダリティーに関連するイメージだけでなく、より抽象度の高いイメージにも関与すること、また音象徴は感覚モダリティー全般にかかわる共感的象徴関係のひとつとして位置づけられるのではないか、という示唆がえられる。

オノマトペの言語的統合性

秋田喜美 (大阪大学)

オノマトペ (擬音・擬態語) は形式的・意味的・記号論的に「有標」な語であり、近年、その機能特性は絵画・映像的ジェスチャー・引用とともに「描写」(depiction) という概念で捉えられている (Dingemanse 2011). 一方で、オノマトペの有標性には段階性が見られることが、複数の言語で報告されている (Kita 1997; Dingemanse 2011). 本発表では、オノマトペの形態統語的統合性と描写性の逆相関を、日本語オノマトペに関する 2 つのコーパス調査に基づき、量的に実証する. 研究 1 では、『名大会話コーパス』の友人間会話から得られた (準) オノマトペ 921 語を用い、様々なタイプの文に現れうる日本語オノマトペさえも、ハウサ語などいくつかの言語が文法性対立として見せる文タイプ制限 (= 肯定平叙文にしか生起できない) を、選好 (= 肯定平叙文に生起しやすい) として見せることを示す. また、その選好の程度がオノマトペの形態統語的統合性と逆相関することも指摘する. 研究 2 では、マルチメディアコーパスである『NHK 東日本大震災アーカイブス』から得られた (準) オノマトペ 728 語を用い、オノマトペの表出形式 (イントネーションによる前景化、発声法による前景化、強調形態) の出現頻度が、それが生起する形態統語構文によって段階的に異なることを見る. この段階性は、オノマトペとともに描写記号とされる映像的ジェスチャーとの共起の仕方にも現れる. 以上より、1) 言語におけるオノマトペの段階的統合とそれに伴う描写性の減退、また、2) この相関が傾向に留まるのか、文法の一部をなすのかの言語差という、オノマトペの類型論の足がかりとなる問題が提起される. 更に、これらの潮流に向けて質的・量的に豊富なデータを提供できる日本語研究の重要性も、本研究で強調すべき点である.